

武蔵野市市民活動推進委員会

第4回委員会 議事要旨

日時：平成28年7月26日（火）午後3時から午後5時

場所：武蔵野市役所412会議室

1 開会

- －事務局より手持ち資料確認
- －委員長より今回の委員会の内容説明

2 議事

（1）計画の実施状況について

- －事務局より資料1を基に報告を行う

（2）計画の実施状況に対する評価表の作成

（質疑・意見交換）

■委員長

- ・資料1で、前回から議論していた、それぞれ関連する事業を上げて、市のほうとしての自己評価を説明いただいた。本日は、委員会としての評価を出していく。ただし、ここで合意形成というのは難しいので、ご意見を出していただいて、事務局にて集約して、後日確認するという方法をとりたい。
- ・資料2に、参考指標として挙げた数値の一覧表があり、資料3には事業の概要の一覧があるので、疑問点があれば参照するということがよいと思う。
- ・例えば、施策1の「市民活動のきっかけづくり」について、それぞれの方がご覧になっている今の状況や、資料を見ながら、よくやっていると思われる点や、課題になる点を出し合うのがよいと思う。
- ・基本施策1「市民活動の裾野の拡大」、施策1「市民活動のきっかけづくり」について、何かあるか。

■副委員長

- ・評価の方法と関係するかもしれないが、実施した事業について評価することは、指標も出ているので、すべきだと思う。きっかけづくりに関して言うと、市のほうとしては何が一番きっかけづくりになると考えているのかを聞かせていただきたい。
- ・実際に市民活動をしている方たちはどういう経緯で参加しているのか、どういうきっかけで入ってくる方が多く、それぞれの事業の設定の仕方が合っているかという点が、知りたいところなので、その辺りはどうか。

■委員長

- ・それぞれ委員の方のご経験の中から、きっかけづくりはこういうことが大事ではないかということを書いていただきながら、事業について何かコメントをしていただくということではどうか。

■副委員長

- ・実際には友達に誘われて参加するということが多かったりするので、実際市民活動をしている人に声をかける方が効率的かもしれないと思う。実施事業では、実際に声かけしている事業がないというところも評価の中に入れていくといいと思う。

■委員長

- ・たしかに、そこから話のきっかけをつくっていけると、実質的な話し合いができるかもしれない。
- ・何かきっかけとして感じたことはあるか。

■副委員長

- ・成蹊大学の学生の場合は、ほとんどは、知っている人に誘われている。実施事業を見て、やってみようかなと行く人もいると思うが、大抵は知っている人に誘われて参加している。
- ・ボランティアを募集するときには全学生に向けて、ボランティア支援センターからポータルサイトに掲示を出す。ボランティアの募集を出すことによって、関心を持ってくれるのはたくさんいる学生の中で1人か2人かもしれないが、ボランティアの募集を行っ

ていることや、定期的に行っているという情報を届けている。

■委員長

- ・コミセンを運営されていて、実際に市民の方を見てなにかあるか。

■委員

- ・私はPTAの関係の方から誘われて入ったが、一本釣りのような形で誘うこともある。また、普段けやきコミセンの前を通っていて、ふらっと立ち寄られた仕事をリタイアされた方が、実際のコミセンの活動に入られたという例もあるので、いろいろな形があると思う。ただし、基本的にはやはり口コミだと思う。

■委員長

- ・ふらっと立ち寄られたということは、通りかかって何かおもしろそうだなと思ったという事で、その辺りの誘い込みの方法も重要かもしれない。表に何か張り紙があると、ふらっと行ってみようと思う。

■委員

- ・表に張り紙を張り、イベントをやっているということを知ってもらうために、立て看板をつくって道路側の通行人に分かるような場所に立てている。

■委員長

- ・他の方は何かあるか。

■委員

- ・資料1の実施事業の21子育て支援講習会に、20年前に子供が小学生になって、ちょっと手がすいたので勉強したいと思って聞きに行った。その講習会を受けたら、ひまわりママという団体をつくろうという流れになって、現在まで来ているので、そのような最初の一步が踏み出せると、かかわりが増えていくと実感した。
- ・市報を見て、子供が帰ってくるまでの時間なら行けるかな、という簡単な思いで受けた。

■委員長

- ・本日の後半に議論する、子育て世代、在学、在勤者をどう誘うかという点に密接にかかわるので、ここは少し丁寧に議論したいと思う。

■委員

- ・私はPTAからなので、やはりそういう、学校の関係、保護者会や学級委員といった役どころから入っていくということがあると思う。

■委員

- ・幼稚園でも母の会というものがある、そういった会で初めて何かやってみようというのが出てくる。

■委員長

- ・それは大事なことだと思う。プレイスではどうか。

■委員

- ・講習会から興味を持ってボランティアサークルやボランティアグループを立ち上げたり入っていったりするということはあると、現場を見ていて思う。

■委員長

- ・人が動くときの要因として、「プッシュ要因」と「プル要因」という表現を使うときがある。今までの話を聞いていると、まずはプル要因が大事だと思う。誘われるということは、プル要因の1つである。また、先ほど話があったPTAというのは、どちらかというとハードルが低く、全員が対象となるようなものである。自分だけが特別に行くのではなくて、ハードルが低く、自然に、当たり前のように行くという、これも1つのプル要因だと思う。
- ・もう1つ、プッシュ要因というものも大事で、これは恐らく養成講座のような、もう少しまとめて言うと学びの機会。そういった養成講座などを受けて、問題意識が高まって、市民活動に参加する。
- ・行政の事業で主に並んでいるのは、どちらかというとプッシュ要因が多い。何か場があ

って、それに参加したら興味を持って動き出すという形。だが、実際には、人々はプル要因で誘われる。

- ・私も、緑ボランティア団体の活動を行っており、人材を引っ張ってくるという形で誘っているが、直接会う人しか誘えないので、実際にはプレイスやボラセンなどに情報を出して募集している状況である。
- ・プル要因に対して、公的なセクターが役に立てるとしたら、広報の支援、PRをすることだと思う。直接声をかけるということは範囲が限られるが、情報誌を出したり、インターネットにて情報を出していくと、募集することがとても効率よくできると思う。
- ・実施している事業を見ると、プッシュ要因としてはある程度やっていると思われるが、プル要因としては、情報提供が重要になってくるので、施策2の「多様な活動につながる情報の提供」と絡んでくる。多様な活動につながる情報を提供というのは、口コミで誘うなどの活動を助けるメディアなどの支援ということになるのだと思う。

■副委員長

- ・施策4「市民活動に関する学びの機会の提供」においても、PTAのお母さんたちに様々な活動に参加してもらうための誘う方法などを学ぶ場があってもいいと思う。

■委員長

- ・例えば、養成講座を受けただけでなく、実際の活動と橋渡しする要因があったと思う。講座のようなきっかけづくりのプッシュ要因となるものを提供するとともに、実際の活動に橋渡しできる仕組みもあわせてつくることで、市民活動へ参加してもらうことにつながると思う。
- ・次に施策2「多様な活動につながる情報の提供」について何かあるか。

■副委員長

- ・市でツイッターなどはやっているか。

■委員

- ・ツイッターは、平成23年の東日本大震災の直後からやっている。武蔵野市のツイッターのフォロワー数は、1万6,000程度であり、人口の1割以上というのは、他の自治体と比

べても多いと思う。

■副委員長

- ・ ツイッターの中で、実施している事業がどれくらい紹介されているか、その質がどうかという点は、情報の提供や活動につながるかどうかということを考えたとき、大事かもしれない。

■委員

- ・ ツイッターの中でもそういった情報は投げかけており、情報提供につながっている。

■副委員長

- ・ 実施されている事業が、どういう経路で、どのような質を持って情報提供されていて、どれくらい市民に届いていて、市民はそれをどれくらいわかりやすいと感じているかというところは、指標に出すのはなかなか難しいですが、そういうところがチェックできると次につながるという感じがする。

■委員長

- ・ 実施している事業そのものが情報発信の事業と位置づけているが、実はこういう事業を発信するというのがまた大事であるということ。それは一つポイントだと思う。
- ・ また、市が主催でやる事業以外に、市民活動団体が活動しているものを、広報支援ということでパンフレットを掲載したり、プレイスがウェブで市民活動の情報を提供したりというのは必要である。

■委員

- ・ 市民活動団体がこんな事業をやっているということはフェイスブックでフォローしたりしている。

■委員長

- ・ 続いて、基本施策2「市民活動の促進と自律・自立に向けた支援の充実」の施策1「情報提供の充実」についてはどうか。

■副委員長

- ・参考指標にフェイスブック閲覧状況が出ている。

■委員長

- ・市民活動団体が行っている活動について、フェイスブックにて情報を提供しているという意味で記載されている。
- ・今回は、実際に活動している市民活動団体に関する情報提供についてであるが、先ほどの議論に出た問題はこちらにもある程度共通して言えるといつてよいと思う。活動している内容の情報提供や活動団体に対する情報提供がある。
- ・ひまわりママなどは、少しずつ自律、発展してきて、今はすごい。そういったプロセスの中で、情報提供という観点から振り返ってみて、こういうのがありがたかったとか、もっとこういったものが必要じゃないかといったことはあるか。

■委員

- ・評価表の実施事業の24子育てフェスティバルについて、以前は紹介パネルだけ出せばいいという参加の方法だったが、今は実行委員会形式になったので、いろいろな団体が主体的にかかわっており、うちの団体は紙芝居ができる、エプロンシアターができるといったことや、団体の紹介をどれくらいの時間でやるかといったことを、団体同士で話し合っており、すごくすてきだと思う。

■委員長

- ・団体の自律の度合いに応じて、参画の度合いが増えてきたということだと思う。
- ・他の方はどうか。もっとこのような情報提供が必要ではないかといったことはあるか。

■委員

- ・例えば市民活動団体に自立を促すときに、一般の講習会と違って、その活動団体に向けて必要なスキルをピンポイントでアップさせる講習会が少ない。三鷹市のほうは、例えばウェブを駆使してPRするための方法というような講座が多いが、武蔵野市は、団体を支援して、スキルをアップさせて自立に促していくような、創業講座が少ないと思う。

■委員長

- ・プレイスでは市民活動団体向けのマネジメント講座がある。

■委員

- ・それでも少ないと思う。

■副委員長

- ・プレイスのマネジメント講座は、講座を何回かやるのか。具体的に何か項目ごとにやっているのか。

■委員

- ・数だけ見ると少ないかもしれないが、組織の維持のための財務や広報の講座、助成金をどう獲得してくるかといったノウハウ的な講習会を、毎年テーマを決めて、各団体のステージに応じて行っている。

■委員

- ・活動の立ち上がりのところでは、創業や起業セミナーを受けたい人たち、まだ生まれていない人たちを巻き込んだようなやり方を、熟練期の人たちには、維持していくための方法やノウハウを、もっとピンポイントに、もっと数多くやれたらいいと思う。

■委員長

- ・そういったことだと、プレイスが直営ですべてやるのには、限界があるかもしれないので、みんなで企画して、分散型でやれる方法があるといいと思う。

■委員

- ・そういう仕組みができるといいと思う。

■委員

- ・いわゆる創業支援に関しては、産業振興部門で実施している。創業支援関係の講座などを広げてきているというのがここ数年の流れである。日本政策金融公庫や金融機関など

とも連携した形で実施しているが、創業支援の分野と市民活動分野が若干離れてしまっているのは、庁内的な課題だと思う。

■委員

- ・他市は、市の動き、市民活動の動き、民間の動きが、もう少し近いというか、一緒に進んでいるような感じがある。

■副委員長

- ・成蹊大学では、電通の方に来てもらい講座をやってもらった。学生たちがボランティア仲間を増やすにあたり、ボランティアに参加してもらうための心理的なハードルがあるが、「午後の紅茶」の宣伝で、ほかの緑茶ではなく紅茶を飲んでもらうために心理的なハードルをどうやって下げるのか、という一見関係ないように思えるテーマでワークショップをやってもらって、参考になることが多く、すごくよかった。一見そう見えないけれど、実はすごく役立つといったことはよくあると思う。

■委員長

- ・要するに、市民活動とマーケティングや経営がセットであるということか。

■委員

- ・従前より、いわゆる非営利、営利を目的としないという部分についての線引きが、他の自治体と比べると若干厳しい部分の実態としてあると思う。少しでも営利を目的とすると、商業的というような判断になってしまう。

■委員

- ・武蔵野市は特にそれが強いように思う。

■委員長

- ・コミセンでは、情報提供という点で、何か感じることはあるか。

■委員

- ・今一番心配しているのが、けやきコミセンにまちづくり局というチームがあるが、マンネリ化というか、仲よし同士のクラブになってしまっているという側面があるので、すぐには難しいが自主クラブとして自立してもいいのかなという考えも持っている。

■委員長

- ・コミセン内の団体に対しても、ステージに応じた学びの場があるといいと思う。
- ・続いて、施策2「相談体制の拡充」について、何か感じていることはあるか。

■副委員長

- ・相談件数が減っているとの話があったが、原因は何なのか。どういうふうに分析しているのか。

■委員

- ・市民活動団体のステージごとに悩みは全然違う。創業当時はいろいろな悩みがあるが、成熟してくるとまた違う悩みがある。

■副委員長

- ・みんな自立したので、相談しなくてもよくなったということか。

■委員

- ・成熟してくると、相談が少なくなってくる部分はある。

■委員

- ・けやきコミセン流に言うと、相談する人が減っているということは、活動がスムーズにいつているという見方ができると思う。

■副委員長

- ・減っているからいけないというわけではない。

■委員長

- ・これは、プレイスの市民活動フロアの運営協議会でも話題になっているが、相談窓口があることを、大々的にPRするといいいのではないかという意見も出ている。
- ・ボランティアセンターやプレイスには相談窓口があるが、市役所には7階の市民協働サロンの情報コーナーだけしかないので、市役所で相談できるといいうと思う。

■委員

- ・市の仕事として、どこの部局も相談を行っているのが実情としてはあるので、相談窓口として設定していく必要があるのか。そこだけで完結できないことについては別の部局につなげていくといったネットワーク化を含めて相談ということであれば、幅広に行っていると言えると思う。

■委員

- ・コミセンのような、みんなが行きやすいところに相談窓口、いろいろな市民活動の入り口になるところに、相談できる人がいるという形がやはり望ましいと思う。

■委員長

- ・大学の例で、学生相談の窓口がいろいろなところにある。様々な場所にクローバーマークが貼ってあり、マークがあるところに行けば必ず相談を受け付けてもらえる。
- ・市役所やプレイス、コミセンなどに、そういったマークが貼ってあって、そこに行くと、仮にその人はわからなくてもどこか紹介できるといった相談のネットワーク化ができるというと思う。

■副委員長

- ・成蹊大学でもボランティアセンターをつくるときに、私が週に1回3時間相談窓口を作ったところ、幾つかボランティアセンターを作るにあたってすごく大事な情報が得られた。コミセンなどにも、月1回でいいから、巡回コーディネーターのようなものがあるといいいかもしれない。

■委員

- ・まちの相談員というと、民生委員も相談員になると思うが、いろいろな形での相談ができる人であるのに、それがあまり認知されていない。また相談員をコミセンにつくるといって、相談窓口が幾つもできてしまい、じゃあ誰に言えばいいのかということになってしまうので民生委員とも連携を図る必要があると思う。

■委員長

- ・次に施策3「財政的な支援」についてはどうか
- ・実施事業にプレイスの「みんなの講座」は入っていないのか。

■委員

- ・「みんなの講座」は、財政支援というよりも、団体の育成が目的なので記載していない。お金を補助するのが目的ではなくて、プレゼンの場を提供するのが大きな目的である。

■委員長

- ・ただし、受ける市民活動団体の側からすれば同じだと思う

■副委員長

- ・例えば、男女共同参画推進団体補助事業というのは、いろいろな講座に補助をするということか。

■委員

- ・男女共同参画推進団体補助事業については、研修会、講習会などで公開のものや、調査研究などについて、1団体5万円を限度で補助をするという形である。

■副委員長

- ・あくまでも所属しているNPOなり市民の団体の市民がやる活動に対して直接出ているというふうに考えてよいか。

■委員

- ・市民の団体に対して補助金を出している。最終的な成果の確認などをする関係から、どうしても団体にならざるを得ないという部分はある。

■委員長

- ・次は、施策4「市民活動に関する学びの機会の提供」について、何かあるか。
- ・武蔵野市の中で地域の課題を学ぶようなきっかけになる講座が少ないという気がする。例えば他の自治体だったら、「何々学」という名称で、その自治体・地域に関する環境、福祉や歴史などの、さまざまな問題を学ぶ。武蔵野市は、各部局でそれぞれ行っている講座などを体系的にやれるようになってもいいのではないかと思う。

■委員

- ・市政全般の課題に関しては、例えば長期計画や個別計画をつくるときに、ワークショップなどの形で、課題検討などを行っている。
- ・教育委員会では、小中一貫教育を検討しているが、教科プログラムの1つとして、武蔵野市民科というものが、報告書に示されている。

■委員長

- ・プレイスの生涯学習機能などもとても人気があっていると思うが、市民活動につながるかと考えるときに、現状は難しい面もあると思う。そういった講座の中で、関連する市民活動団体を紹介していくなど、学びながら市民活動に意識が行くところがあるといいと思う。

■委員

- ・市民社協でファシリテーターの養成講座をやっている。その中で、地域の課題などを自分たちで出したりするというのがあるが、ファシリテーター講座を受講したファシリテーターの人たちが学ぶ場がないと思っている。そういう人たちこそ、一連した地域の課題を講座として学び、スキルアップしていく流れがあれば、ファシリテーターも発展してコーディネーターに結びつくのではないかと思う。

■委員長

- ・ファシリテーター意識が高まった方が、実際の地域を学ぶということは、とても大事である。ノウハウを学ぶことと、内容を学ぶこと。

■委員

- ・武蔵野のコミュニティに関して、「これからの地域コミュニティの検討委員会」という委員会から一昨年に報告があり、その中で、コミュニティにかかわる方たちが地域をつなげていく力をどのように身につけていくかということが課題として示された。コミュニティ協議会のメンバーは、協議会の中で様々な活動をしていくと、他の団体ともつながっていくこともある。さらに幅広く意見交換をしたり、つないでいくための力をつけるため、今年度からの「コミュニティ未来塾」という新しい事業をスタートした。まだ、これから設計に入っていくというタイミングではあるが、新たな取り組みとして進めている。

■委員長

- ・そのような場で学んだ方が、地域の内容的な課題を学ぶというものに入っていけると、実際にいろいろと動けると感じる。

■委員

- ・中高生リーダー講習会というのがあるが、始まってから15、16年たつと思うが、自分がジャンボリーに行って楽しかったのでサブリーダーとして参加したいという、自発的なところから始まる。部活で忙しい中、一生懸命講習を受けて参加してくれるので、すごくありがたいのですが、もう少し内容に質的な向上が必要だと思う。
- ・高校生ぐらいになると、大人よりも倍の働きをしてくれる。初めに中高生リーダー講習会に参加していた人たちが大人になって、子どもができたりして、地域のことにもかかわってくれているので、これからはすごく楽しみだと期待している。

■委員長

- ・大人だけではなくて、中高生への市民活動の基礎の講習というのは、とても大事である。
- ・続いて施策5「団体交流の促進」についてはどうか。市民活動をやっている立場からす

ると、交流は目的ではなく手段であって、役に立てば交流もいいが、初めから交流会があるから交流会に行こうというのは、行きにくい気がする。行政から見ると交流は大事なことだが、市民活動をやっている立場からすると、それより自分たちの活動が大事で、交流どころではない。役に立てば行ってもいいというぐらいなので、市民活動団体にとって役に立つ、またはお土産があるような交流の仕組みが大事である。

■副委員長

- ・TAMACOMなどを見ていると、集まって、そこで知り合っただけで次につながっている感じがする。

■委員

- ・交流の場に集まった方々は、名刺交換したり、団体同士で何か事業ができないかといったご相談はしているが、やはり少ないのもっと集まってもらいたい。そのためには、参加してためになったり、参加して楽しいというものをつくらなければいけない。

■委員長

- ・コミセンなどは、交流という点ではどうか。

■委員

- ・地域フォーラムなどは、けやきコミセンの場合は地域の組織団体全てに声をかけて、テーマを決めて皆さんに集まっていた。その後、さらに団体間をつなげる場づくりのため、ピザを焼いて大盤振る舞いして交流を図った。

■委員長

- ・つながるためには飲み食いも大事だと思う。
- ・他にはどうか。

■委員

- ・多摩CBネットワークの集まりに行ってきたが、行ったはなから熱気が違った。これをやったら自分たちの得になるというか、自分たちのPRができるというか、つながるこ

とによって次の展開を想像したり、企画を生んだりというところを、みんなが持ち寄っていて集まるという態勢が全然違っていた。

- ・今度、多摩の女性たちで起業した人たちなどを集めてマママルシェをやろうかなと思っているが、集まって何かをやることで、さらに自分たちが、こちらのエリアでも活動できる、ここでつながれば何かできるという、次に発展するイメージを持つと、積極的に交流に参加してくれるということを感じている。プレイスや行政やボランティアセンターの交流というものが、目指しているものと、根本的なものが違うと思う。

■委員長

- ・施策6「中間支援組織等の支援力の強化」についてはどうか。

■副委員長

- ・成蹊大学の学生などは、プレイスと市民社協、ボランティアセンターにはお世話になっていて、活動を活性化してもらっている。

■委員長

- ・前向きに活動している団体からすると、プレイスやボランティアセンターは、活用価値があると思う。

■委員

- ・中間支援組織は、プレイスと市民社協しかないのか。

■委員長

- ・中間支援を厳密に言うと、市役所は、全ての部局が中間支援を持つべき立場にあると思う。また、コミュニティ協議会自体が中間支援的な機能を持っているとも言える。例えばコミュニティ協議会の中のけやきコミセンにしてもまちづくり局があって、それぞれの活動団体が立ち上がっている。コミュニティ協議会の中に、それぞれの活動をサポートするような機能があると、活動が活性化していくと思う。

■委員

- ・さまざまなイベントを実施するにあたって、それぞれの所管課が中間支援的な位置づけでコーディネートしているというのは実情としてあると思う。
- ・昨年度市ではセブンイレブンとイトーヨーカドーとの3者間での包括連携協定を結んだ。市として協定を結び、連携を進めるということも、一種の中間支援的な動きにはつながっていくと感じている。

■委員長

- ・総合的なNPOとしての中間支援組織がないという中で、プレイスや市民社協、市の部局について、中間支援機能を高めるという位置づけになっていると思う。
- ・続いて基本施策3「市民活動の場の活用促進」の施策1「武蔵野プレイスの有効活用」についてということで何かあるか。
- ・先日、「プレイスの未来を考える」というシンポジウムに参加して、興味深かったのは、北欧の図書館がすごくうるさいとのこと。要するに、図書はあるが、コミセンみたいなもので、みんなが寄り集まって弁当を食べたり交流している。図書館でまじめに、静かに本を読みたい人のために特別な部屋が用意されていて、そのほかは騒がしい。プレイスを見ているとみんな静かで、個人利用がすごく多い。個人利用の人たちをつなげるような仕組みがあるといいと思う。

■副委員長

- ・プレイスなどは、図書館に行ったが、ブースを借りようと思って上に行くと何か相談している人たちがいて、市民活動しているということが感じられるので、いろいろなことが見える仕組みはいいと思う。

■委員

- ・特に3階は、個人で勉強に来た人などが、市民活動団体が活動している景色を見て興味を持つという点では、いいと思う。ただし、まだまだ個人の利用が多いので、それをどうつなげていくかは課題である。

■委員

- ・プレイスは、設立当初からいわゆる「回遊性」という考え方をもっており、さまざまな方たちが動く中でつながっていくというのが、プレイスの特性だ。

■委員

- ・この委員会に参加するまで、プレイスは遠いという印象があって、使っていなかったが、一度行き出したらプレイスによく行くようになって、なぜこういった施設を他にも作ってくれないのかと思う。
- ・近くないと行けないという人たちのためにも、プレイスのような機能を充実させてほしいと思う。

■委員

- ・直接項目の内容ではないが、個別の団体の情報提供を支援する仕組みという点について例えばプレイスの中だと、指標の40番にあるチラシの設置件数は、団体間、個別の団体を支援する仕組みとしての指標として見ることが出来ると思う。

■委員長

- ・プレイスにチラシを置くと効果が高いというのは、市民活動団体のイメージとしてある。
- ・プレイスの市民活動フロアのカウンターの中に、リーダーのような人がいてリーダーシップを持って動いていると、もう少し機能が高まるような気がする。
- ・続いて施策2「多様な活動の場の提供」について、何かあるか。

■副委員長

- ・「場」というのは、機会という意味か、それとも場所という意味か。

■委員長

- ・公共施設についての情報発信や有効活用ということだから、公共施設がもっと融通がききながら、いろいろと提供できるといいということだと思う。

■委員

- ・先日、男女共同参画フォーラムがあったが、どこでやるかという話になった時に、使える場所が限られていて、場がないという話になった。
- ・プレイスのフォーラムのような規模の場が他にもあれば、もっといろいろな情報を発信したり、イベントができると思う。

■委員

- ・実施事業22子育てひろばボランティア養成講座については、行政の主導型でやっていたが、最近ではコミセンの中で、地域の子育てをするお母さんたちに先頭に立ってやってもらうという傾向になっている。
- ・けやきコミセンでは、以前は子育て井戸端会議という、小さいお子さんがいるお母さんたちが集まって、子どもは子どもルームで保育のプロが保育をしてくれている中で、いろいろな悩みや愚痴を聞く会議があったが、今はやめてしまっている。
- ・コミセンを利用している子育てをサポートする団体は2つぐらいあるが、ある程度有償なので、なかなか子育て広場とは結びつかない状況になっている。

■委員

- ・コミュニティセンターなども含めて、場所の量はあると感じている。そういった場があるということをはいかに情報提供していくかということは、必要である。
- ・過去には、市の中で活動の場がなく、例えば銀行の会議室などを全市的にリストアップして、協力してもらっていた時代もあったと聞いている。
- ・実施事業23まちぐるみ子育て応援事業については、町場の店舗を活用して、子育て支援をするということで、これまで武蔵野市では、民間の店舗等を利用したケースは少なかった。今年始まったいきいきサロンという福祉関係の事業についても、個人のお宅も含めて、場の活用等を進めている。公共的な施設だけではなく、民間の施設を利用できるような情報提供などは、今後必要だと思う。

■副委員長

- ・場の提供ということでは、市や市民社協が行った事業ではかるのではなく、例えば、プレイスのスペースで会議をやっている人がどれくらいいるかといった指標ではかるべき

ではないか。

■委員長

- ・指標にコミセンの年間利用者数があるが、合わせてプレイスの利用状況や市民会館の利用団体数なども必要であると思う。

■委員

- ・コミセンは、主催事業でないと使えなかったり、何か新しいことをしようとしたときに、縛りがあつたりして、使いづらいという側面がある。
- ・場の見直しということで、本当の意味で使える場はどこがあるのかということ、市で考えてもらいたい。

■委員長

- ・基本施策4「課題解決のための「連携と協働」の推進」の施策1「連携と協働に向けたネットワークの構築」ということで、先ほどの地域フォーラムなども、この一環にも入ってくると思うが、どうか。

■副委員長

- ・プレイスの市民活動登録団体同士のメーリングリストや団体間でのツイッターといったものはあるのか。

■委員

- ・登録団体のイベント情報などを流す仕組みは広報支援としてはあるが、団体同士のネットワークやSNSなどにはつながっていない。

■副委員長

- ・成蹊大学のボランティアセンターでは、個人で登録している人たちに向けて、ボランティア募集の情報提供を行うことはよくある。

■委員長

- ・プレイス登録団体同士のつながりと合わせて、異なるセクター、市民活動と企業というような連携・協力も含むべきだと思う。成蹊大学などは地域と様々なところで連携しており、モデルケースと言えると思う。コミュニティ協議会とNPOの連携も含まれると思う。

■委員

- ・実施事業26青少年問題協議会・地区活動事業などは、地区ごとに条件や状況が異なるので、地域性があるということを感じる。

■委員

- ・ごみ減量協議会などは、ごみ減量に関して、様々なコンビニやスーパーなどと提携している。

■委員長

- ・続いて、市役所の中の庁内体制について、施策2「連携と協働に向けた庁内体制の構築」について何かあるか。
- ・よく縦割り行政と言われるが、それぞれの部門の課題に対して、それぞれが取り組んでいるということだと思うが、例えば、生物多様性などは環境政策課の課題になっているが、生物多様性をどこで実現するかというと公園や緑地で実現するのだと思うが、緑のまち推進課はほとんど関係がなく見えてしまう。

■委員

- ・施策の目的ごとに縦割りに組織をつくらざるを得ない部分があり、課題だと思う。
- ・ただし、縦軸だけでは解決できないものについては、ワーキングチームや庁内に検討連携会議などをつくって、横串を刺していくことはある。
- ・武蔵野市は部局の見直しを、10年ごとぐらいで行っており、その時の課題に応じた形で、切り分けて、システムと横串との両方で実施はしているが、難しい側面がある。

■委員

- ・ けやきコミセンの近くにテンミリオンハウスをつくる話があり、福祉の会が中心となってやっていくという話があるが、人員が足りず、けやきコミセンの運営委員に声がかかっている。また、コミセンの運営委員をやる方はやる気のある方が多いので、いきいきサロンなどでも、やりたいということで5人ぐらいでグループをつくって、市に提出している。いつも地域で同じような方が活動している状況があって、どう考えていけばよいのかと思う。
- ・ 行政の縦割りというところが出てしまっている。庁内の中で話し合うことにより、整理することができないのかと思う。

■委員長

- ・ いつも同じ人が様々な活動をしていて、人材の取り合いになってしまうということはあると思う。
- ・ 最後に実施状況に対する評価について何かあるか。
- ・ 評価をしながら、今後の課題がたくさん出てきたので、今後生きてくるのではないかなと思う。

(3) 担い手不足解消のための取り組み、コーディネーターの具体化

- ・ 子育て世代、在学・在勤者の活躍の場の創出

—事務局より資料6、参考資料②を基に報告を行う

(質疑・意見交換)

■委員長

- ・ 子育て世代や在学・在勤者のどちらかというボランティア活動、市民活動に参加しにくい状況にある方の活動をうまく引き出したり、誘い出したりできるかということについて、フリーディスカッションでいろいろとアイデアを出していただきたい。

■副委員長

- ・ 例えば退職して時間ができた方たちは、スムーズに地域に入って活動に参加しているのか。退職した方が地域に還流している形にはなっていないとすると、時間がある人にど

う参加してもらうかを考えたほうが、働き手としてはいいと思う。

■事務局

- ・なぜあえて子育て世代や在学、在勤の方にスポットを当てるかというと、確かに時間がなくて活動になかなか参加していただけないと思うが、時間があるときに活動に参加してもらえそうな素地をつくっておくことによって、将来、退職したときに参加してもらえ土台づくり必要であると考えている。

■委員長

- ・統計で見ると、30代、40代の女性の参加の割合が高い。子育て世代なので、PTAや青少年問題協議会などに参加していることから割合が高くなる。
- ・自分自身にかかわりがあるところについては参加しやすいというのがある。プレイパークなども、子育て世代の方がボランティアで手伝いに行くということがある。学生などは就活に役立つとか、これから社会に出る上で力をつけたいということでボランティア活動をすることもある。本人の利益と絡む部分で、うまくきっかけをつくることが大事なポイントとしてあると思う。
- ・コミセンなどは退職直後の男性がくることはあるか。

■委員

- ・退職直後の男性あまりはいない。体が元気なうちは働きたいという方が多い。シルバー人材センターで働きながらコミセンにかかわっている方もいる。
- ・若い方や在勤の方をつなぎとめるには、努力が必要だと思う。運営委員会の開催時間を隔月ごとに午前、午後、または夜にしたり、あるいは小さい子どもがいる方は運営委員会に参加できる時に参加してもらおうという形にしている。長い目で見て、子育てが落ち着いたらコミセンで活動してもらおう工夫はしていかないといけない。

■委員長

- ・他に何かあるか。

■委員

- ・ひまわりママを利用していたお母さんたちが、子どもが大きくなって、自分は看護師の資格があるから、何かお手伝いできないかということで来てくれたりする。過去にお世話になったから、同じようなことがしたいというかかわりでつながっていると実感している。

■委員

- ・私もお世話になったのでお世話をしたいという思いが地域活動に入るきっかけである。子育てで自分が大変なときに、一緒に見てくれる方がいたり、行く場所がないときにコミセンが場を開いてくれたということがあったので、何か恩返しができるときにはやりたいという思いがあった。そのようないい形の循環を作っていくことが大事なことだと思う。
- ・30代、40代の人というのは、PTAでいろいろ活動していて、それがボランティアと位置づけられるのであれば、ボランティア活動をしていると言える。ただし、学校内だけの話であって、地域に出てきているわけではない。
- ・参考資料②の「あえて継続性は求めていない」という言葉に集約されていると思う。ただし、どこかに循環のシステムをつくらなければ、終わってしまう。流出を食いとめるための循環のシステムを考えないといけない。
- ・ひまわりママの例は循環の一番いい例だと思うので、どのように地域に入ってもらうか、地域のデビューの仕方があるか考える必要がある。
- ・小さい子どものいる人は、そこからが地域に入っていくスタートだと思っているので、スタートの段階でどのように地域の人たちが寄り添うか、そして地域にはこういう人たちがいるということを知ってもらうことが大事で、そういったつながりを持てるよう考えられたらいいと思う。
- ・お母さんたちには、子どもの成長に合わせて、この時期には出られないという時期があり、その後に、また戻ってこられる時期があるので、戻ってこられるための循環のシステムを構築することが大事だと思う。

■委員長

- ・ひまわりさんは、利用した方が、恩返しのような形で活動を手伝ってくれることを促す

工夫はしているのか。

■委員

- ・特別なことはしていない。感謝や応援の手紙やメッセージをもらったり、お世話になったから、今度は自分が講習会を受けて活動に参加してくれるという方もいる。

■委員

- ・40代、50代の主婦の方は働いている方が多いので、コミュニティ協議会の代表委員会や事務局会を開催するとき、時間の調整が難しいが、何とかやりくりして参加してもらっている。男性の場合は、総合体育館で行っている運動に参加している仲間を連れてきて、コミセンの活動に参加してもらっているケースもある。
- ・様々な会議に参加した際などは、会議に参加している人に運営委員になってもらおうという意識は常に持っている。

■委員長

- ・プレイスは多様な人が利用しているが、何か思い当たることはあるか。

■委員

- ・特に組織として仕掛けということはないが、武蔵野市で市民活動を行っている人にスポットを当てた「市活人（しかつんちゅ）展」の組織版として、例えば、ひまわりママはこのような循環型の組織運営をしているといったことを、団体紹介を兼ねて紹介することにより、他の団体の気づきにつながると思うので、やってもいいと思う。

■副委員長

- ・企業に勤めている人は、案外地域ではないところでボランティア活動などをしている。東北などに通っている人はいるが、地域にうまく還流していない。

■委員

- ・地域で活動すると、顔がわかっているので、リラックスができない。地域でやるリスクは大きいと思う。

■委員長

- ・行動範囲の広がる高校生ぐらいから、中堅の活動的なビジネスマンまでは、地域ということではなく内容に興味を持って参加している。

■委員

- ・様々な活動に参加していると、自分が生まれたところや育ってきた環境に何か還元していきたいという思いが生まれてくるときが出てくる。
- ・PTAに参加している人でも、これだけやったらはいさようならという感じの人と、地域に残らなくてはと思うタイプの人と、つき合っていればわかる。
- ・活動に参加したいという思いのある人を育てる人、そういった人を見つける人が地域にいて、いつも温かい目線を持って、アドバイスができる、そういったコンシェルジュやコーディネーターが必要だと思う。

■委員長

- ・地域の中で「人を育てる」ことができる人。コミュニティ協議会などに、そのような人が何人かいるとうまく循環すると思う。

■委員

- ・人にスポットを当てたり、団体にスポットを当てて、紹介することによって、地域にこんなすばらしい人がいるということを知ることができる。それによって感化されて、自分も後に続けたいと思ったり、何か教えてほしい、話を聞いてみたいと思うようになる。
- ・地域に初めて入った人たちは、地域にどんな人がいるかわからない。自分の住んでいるエリアにこんな人がいる、自分の身近なところに見本とする人がいるということを知ることができるように、モデルになるような人をクローズアップする取り組みがもっとあっていいと思う。

■委員長

- ・最近、ロールモデルという言葉を使ったりするが、目標になるような人がいると、自分もできそうな気がするということがある。
- ・今までの議論で出たものを整理すると、例えばハードルを下げる。けやきコミセンでは、

時間は融通がきくように参加のハードルを下げることであったり、ひまわりママでは、お世話になったから子どもが大きくなったら手伝いをするという循環のシステムができている。当事者性として、子育て経験中の人はPTAなどの子供に関するボランティアなら出やすい、学生の場合、就活に役立つといった形で、企業で動機づけすると参加しやすくなる。また、企業人や大学生は、地域にこだわらず広域的に興味あるものを広げていっていいのではないかと出た。

- ・もう1つの課題で、コーディネーターの具体化とあるが、コーディネーターについて、何が大事かということがあるか。

■副委員長

- ・資質だと思う。成蹊大学のボランティアセンターのコーディネーターが1カ月ほど育児休暇をとった際に、別の方が来たが、東北スタディツアーというイベントをやるにあたって、中心になっている人材をその方が見つけて、上手にエンカレッジしていて、スタディツアーを成功させた。人は大事だなと感じた。

■委員長

- ・人材を育てるとよく言うが、もう一方で人材の発見が大事である。育てると見つけるはセットである。
- ・コーディネーターについて何か他にあるか。

■委員

- ・市内の小中学校でコーディネーターを1人ずつ制度化している。人の発掘という仕事をやっていく。例えば職場体験の場所を探してほしいとか、教科の不足している部分を補うために教師の資格を持っている人を探してほしいとか、地域の歴史を知っている人に話をしてほしいといったことで、人を繋げる役割としてコーディネーターが生まれた。

■委員

- ・コーディネーターについてということとは少し違うが、ジャンボリーに指導者として参加しているお父さんが、学童クラブのパパ友を誘ってくれたことによりお父さんの参加が増えた。お母さんは子どもを通して輪ができる機会があるが、お父さんたちはなかなか

か機会がないので、そういうつながりはいいと思う。

■委員

- ・お父さんの輪というのは、楽しみながらやっていて、自分の時間も使えている。お母さんがやると、日常も全部引きずられてしまうが、お父さんは仕事をしていて、休みの土曜日や日曜日だけ、子供の野球やサッカーが終わった後に町のイベントに参加して、楽しんで、また去ってくというワークライフバランスができています。
- ・とある講座に出ていたお父さんたちが、お母さんを助けるために自分は何ができるかを考え、一生懸命何かやろうとしていた。若いお父さんたちにアプローチしていくということも必要である。

■委員長

- ・最後に何か言い残したことはあるか。なければ議論を終わりにしたいと思う。

3 事務連絡

—事務局より事務連絡

4 閉会

以上